

消防トピックス

被災地の消防団は今

岩手県上閉伊郡大槌町消防団

1 はじめに

大槌町は、太平洋に面する岩手県沿岸の南部に位置し、江戸時代は南部藩に属し、明治に入り周辺の村と合併し、現在の大槌町となりました。

縄文時代の遺跡が多く見られるほか、リアス式海岸特有のワカメ、ホタテ、ホヤ養殖をはじめ、鮭の定置網、イルカ突棒（つくぼう）などの漁業が盛んな町でもあり、昭和50年代初頭には2万人を超える人口を有しておりましたが、若者の圏

外流出をはじめ、少子・高齢化などで現在では1万2千人を割り、辺地、過疎地域の指定を受けております。

観光の名所として、井上ひさしの「ひょっこりひょうたん島」のモデルになりました「蓬菜島（ほうらいじま）」をはじめ、片寄せ波で多くのサーファーが集う「浪板海岸」などがあり、「虎舞」「鹿子踊り」「大神楽」などの伝統芸能が盛んな町でもあります。



蓬菜島

2 大槌町消防団の紹介

大槌町消防団は、昭和23年3月7日、「消防組織法」の施行により正式に発足し、当時は11か分団、ポンプ車2台、手引きポンプ3台、腕用ポンプ9台、団員340人でスタートいたしました。

現在は5か分団14部編成となっており、昭和30年4月に大槌町と金沢村が合併されたことに伴い、この組織体制となりました。

5か分団のうち、1・2・3か分団は市街地や海岸地域、4・5か分団は山間部の地域を管轄とし



大槌虎舞



大槌町消防団消防演習

4 消防団員の活動

そんな状況下ではありましたが、団員は消防署員、自衛隊、緊急援助隊、警察官のかたがたと相互に連携、協力しながら避難先に取り残された町民の救助活動をはじめ、避難所への負傷者搬送、行方不明者の搜索活動、林野火災の巡視警戒活動など、昼夜問わず不眠不休の活動に従事しておりました。

下は当時の行方不明者搜索活動状況の写真であります。

5 現在抱えている課題

現在、国からの災害復旧補助事業をはじめ、各種助成事業、数多くの団体様からの寄贈などにより、震災で流出した仮設消防屯所の応急復旧や消防車両、安全装備品などについての整備が図られているものの、まだ多くの消防団員が仮設住宅での生活を余儀なくされているため、各部ごとの参集も難しい状況となっております。

平成25年10月1日現在、団員の定数257人に対し、実員数は183人で、震災から20数人が退団し、新入団員数も伸び悩んでいるため、コミュ



ニティーがばらばらな状態が続くことで「団員減少に拍車がかからなければ…」と危惧する状況が続いております。

また、流出した消防屯所の再建や消防団の再編についても今後の課題となっており、倒壊した海岸防潮堤の建設や現在大槌町で進められております区画整備事業等での進捗状況と町民の要望を踏まえながら、将来的に意味のある再建・再編を進めなければなりません。

6 おわりに

大槌町消防団ではさまざまな津波防災体制の下、「地震＝津波」との思いで活動してまいりましたが、未曾有の「3.11大震災」ではかけがえない仲間の団員が多数犠牲となり、この大震災を教訓に津波予警報発令時には自身の身の安全を守りながら活動する「津波到達予想時刻15分前退避」のルールを徹底しておりますが、町民一人一人に対しても、「津波から身を守るためには高台に逃げろ!」と自主避難を呼びかけ、二度と同じような悲劇を繰り返さない体制づくりの構築が必要であると考えます。





震災前の大槌町

「負けねえ～ぞ！大槌！」

全国から多くの御支援をいただき、ほんとうにありがとうございました。

私たちは皆々様の温かい御厚情は忘れません！
震災により一時活動中止を余儀なくされたラッパ

隊も、殉職した団員家族の強い要望と全国からの御支援のおかげで、平成 25 年 7 月に活動を再開しました。



大阪府豊中市からラッパの寄贈を受ける煙山消防団長
(右から 2 人目)



活動を再開した大槌町消防団ラッパ隊

消防トピックス

地上操作型半鐘叩き装置の設置 (安全に火の見る鐘をカーン!カーン!)

長野県須坂市消防団

1 須坂市の紹介

須坂市は長野盆地の東部に位置し、人口は5万2千人余、面積は149.84平方キロメートルの都市です。西は海拔340メートル前後の平坦部で、東は2,000メートル級の山々から、幾筋もの川が流れ、その扇状地に街や田畑があり、全国でも有数のリングと巨峰の産地としても有名です。気候は、太平洋側気候と日本海側気候の境目にあり、冬季にはまとまった量の積雪がある寒冷地です。

2 須坂市消防団の概要と活動

須坂市消防団は音楽隊を含む団本部と、地域ごとに11個分団37個部の合計873人(平成25年4月1日現在、条例定数881人)で構成されています。

近年、地域防災の要としての消防団に、年々多くのニーズが求められるようになり、火災時の消火活動をはじめ、水防活動、大災害時の避難誘導、各地域行事の特別警戒、行方不明者の捜索など、活動内容は多岐にわたるようになってきました。

それに伴い、これらの活動に備えるため、基本訓練である規律訓練、放水訓練、中継送水訓練、山林火災防御訓練、総合防災訓練、普通救命講習、S-K-Y-T研修など活発な訓練を行っています。予防消防の活動にも力を入れており、年2回の消防団広報紙「さくら」の発行、各分団での積載車による定期的な防火巡回を行っています。

消防団員のみで構成する音楽隊も、市をはじめ各種団体の出演要請により、演奏活動を通じて予防広報を行っています。毎年、秋の火災予防運



写真②「消防団音楽隊定期演奏会」



写真①「遠距離中継送水訓練」



写真③「市内イベントにおける消防団防火パレード」



動中には、消防団音楽隊定期演奏会を開催しており、今年で29回を数え市民に親しまれております。

また、ラッパ隊は平成元年に、長野県消防ラッパ吹奏大会優勝以降、県大会出場のたびに優勝し、10回の優勝を成し遂げており、各種団体の出演要請や、市内で行うラッパ・パレードを通じて予防広報を行っております。また、忘れてならないのが、春と秋の火災予防運動中は、朝7時00分と、夜8時00分に消防団員により、市内各地域に47か所ある火の見やぐらの半鐘を打鐘し、地域住民に火の用心と予防消防の啓発を実施しております。

3 半鐘叩き（打鐘）の課題

近年では姿を消しつつある火の見やぐらですが、この火の見やぐらの鐘の音は、地域住民にとっては、今もなお火の用心を心掛けるかけがえのない、正にたいせつな鐘となっております。

しかしながら、火の見やぐらへの昇降方法は梯子（はしご）であり、半鐘打鐘は8～15m以上の鉄製の梯子を上り下りしなければならず、高所作業であり冬季、強風、大雨等のときは危険が伴います。また、消防団構成員の年齢が多様化し、高所作業ができる消防団員だけではないので、緊急時の半鐘信号が必要な場合に支障を来すおそれがあることから、どうすれば安全に打鐘することができるかが課題となっていました。



写真④『火の見やぐら』



写真⑤『火の見やぐらに設置された地上操作型半鐘叩き装置』



写真⑥『地上でワイヤーを引くと・・・』



写真⑦『火の見る鐘を叩けます』

4 地上操作型半鐘叩き装置の設置について

消防団員から消防本部への要望もあり、市内の業者が平成23年度須坂市地域研究開発促進支援事業を活用して、本装置を開発しました（特許申請済）。

本装置については、評価試験を実施した結果、不具合点を改良した床置きタイプの鉄製の1号機（試作品）が完成し、平成24年5月に須坂市街地の火の見やぐらに試験的に取り付けられました。

その後の評価結果を踏まえ、鉄製の1号機を設置が容易になるようにアルミ製にして軽量化するなど改良した2号機も新たに作られ、平成25年10月末、市内山間地の火の見やぐらに設置されました。なお、この1、2号機は開発業者の御好意により、須坂市（須坂市消防団）へ寄贈されました。

無電源式で停電になっても打鐘操作ができ、人



写真⑧地上操作型半鐘叩き装置

が打鐘するのと同じ反動する構造となっています。また、この方式は他にない安価な装置となっています。本機は常時利用しているものではなく、風雨及び経年による劣化を起しにくい耐久性があるもので、地上においてワイヤーを引けば叩ける装置を開発したことで、上に登らなくてもよいようになっています。

（特長）・・・特許申請済

- (1) 地上からワイヤーにより半鐘を叩ける機構
 - (2) 半鐘を叩く間隔が調整でき、人間に近い叩き機構
 - (3) 安価でどの火の見やぐらにも取り付けられる
 - (4) 構造がシンプルで故障しないもので雨風に耐えられる
- （アルミ製にて軽量、耐候性に優れたもの）

5 今後について

須坂市消防本部では予算化して、各分団で1か所は取り付けたいと考えております。また、広くPRし消防団員の安全確保のため、早期に、取り付けの推進ができればと考えております。

6 おわりに

消防団は数少ない地域的な組織であり、同時にこれから地域を支える若者を育てる組織でもあります。この地域を支える若者たちが、安全な消防団活動ができるような体制作りは、喫緊の課題であります。

須坂市消防団はこれからも、地域に根ざし、地域と協調し、共に地域の安心・安全を守り育てる原動力であり続けてまいります。